

世界の片隅にある不条理 分断の現場から

萩原 豊 (高38回)

講演の冒頭、高校時代に読んだ飯田高校の先輩で元朝日新聞記者、本多勝一さんの著書がジャーナリストを志す契機になったことをお話ししました。そして、1年ほど前まで駐在した米国や中南米での取材から「世界の片隅にある不条理」を3つ挙げ、今どのような「世界の新たな潮流や構造」が見えるのかをご説明しました。

「世界の片隅にある不条理①」として、南米アマゾンの環境破壊を取り上げました。アマゾンには世界最大の熱帯雨林であり、地球全体の環境に影響を与えます。拡大する違法伐採とともに、金の違法採掘も深刻な問題となっていました。先住民ムンドウルク族の子ども達に健康被害が続出していることも取材でわかりました。要因は、違法採掘に使用される「水銀」とみられるということです。何の罪もない先住民の子ども達に現れ出

もあります。

「世界の片隅にある不条理②」は、中南米の移民難民問題です。故郷を追われた人々は世界で1億人を超え、極めて深刻な課題となっています。難民をめぐる、各国は、排除か包摂かで大きく揺れています。これもまた、母国に翻弄された人々が、「しわ寄せ」を受けている構図と言えます。「個の物語」を伝えるために、米国を目指すハイチ人家族に密着したドキュメンタリー映画も制作しました。映画を観た若い方から、自らの難民観が大きく変わったという感想もいただきました。「無意識の偏見」をどう克服するのも、今後の大きな課題です。

「世界の片隅にある不条理③」は、米国での黒人差別の問題です。2020年、黒人男性ジョージ・フロイドさんが白人警官により殺害され、抗議デモが全土で続きました。米国では白人警官の暴力によって黒人が死亡する事件は数多く発生してきましたが、警官が訴追されることは極めて稀で、訴追されても、ほとんどが無罪でした。奴隷制度の時代から、黒人の命が軽んじられてきた米国の歴史において、「黒人の地位向上」の大きな柱は、警察の「力の行使」との闘いだったのです。



●はきはら・ゆたか
TBS報道局 編集主幹・解説委員長。飯田市鼎出身。鼎中学、東京大学文学部卒。社会部、「報道特集」「筑紫哲也NEWS23」、ロンドン支局長、NY支局長などを経て現職。50カ国以上を取材。

た「不条理」と言えます。現地では精密な検査が十分であるために原因は確定していません。熊本県で起きた水俣病も患者発生から原因物質の確定までに20年近くを要しています。血液中の水銀濃度が、国際基準を大きく超える先住民も多く、現地の国立研究機関や医師は「水銀中毒の可能性が高い」とみています。

背景にあったのは、ブラジル・ボルソナロ大統領（当時）のアマゾン開発への肯定的な姿勢。環境よりも開発を進めるなかで、「ひずみ」が、より弱い立場の人々に現われている、という構造でもあります。「環境保護」が声高に叫ばれる一方で、反発する動きがあることは、ブラジルに限りません。米国でもトランプ支持層に代表されるように、地球温暖化の懐疑派も根強いままで、「環境か開発か」の分断の溝は深く、今年の米大統領選次第では、環境問題の優先順位が大きく下がる可能性

さらに米国社会にある「構造的な差別」まで焦点となりました。バイデン大統領は、白人警官に有罪判決が出た日、「我が国の魂の汚点である構造的な人種差別」への取り組みの必要性も訴えました。歴史的な時間軸から見れば、人種が社会的に定義されてきたことがわかります。これも米社会に現れ出た「不条理」の一つでした。ただ、これにも強い反発があり、メディアが二極化し、社会の「分断」にも大きな影響を与えている現状も説明しました。

「分断」があっても、異なる立場を尊重しつつ、普遍的な価値を踏まえて、地道に熟議を重ね、一定程度の共通項を探していく姿勢が、今こそ求められるのではないか。また政治もメディアも、分断の「架け橋」となる役割を果たすことが問われている、という問題意識をお伝えして講演を終えました。



南米アマゾン取材でのボート移動